

『枕草子』『雪のいと高し降りたるを』

1、はじめに

・作者：清少納言

・成立：平安時代（1001年ごろ）にはほぼ完成していたか

〔平安時代は794～1185年ごろ〕

・ジャンル：随筆

・特徴：平安時代中期に中宮定子に仕えた清少納言が書いた随筆。本来は「まぐらそつし」と呼ばれる。『枕草子』は『源氏物語』の心情的な「ものあはれ」に対して、知性的な「をかし」の世界観を作った。前者は、見て聞いて感じたものをしみじみと思つような感覚で、<sup>1</sup>後者は、感じたものを客観的に捉え表現するようつなものと言われる。

・要約：雪が降り積もる中、中宮定子の問いに、清少納言が当意即妙な返答をした。これに  
対し定子は満足し、他の女房も感心した。

2. 1、本文

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて炭櫃に火おこして、物語などして集まり候ふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、笑はせ給ふ。

人々も「さることは知り、歌などに入歌入ど、思ひこそ尋らざりけれ。なほこの宮の人にはと入まなめり。」と言ふ。

2. 2、本文

雪のいと高う<sup>①</sup>降りたるを<sup>②</sup>、例ならず<sup>③</sup>御格子<sup>④</sup>参り<sup>⑤</sup>て炭櫃<sup>⑥</sup>に火おこして、物語<sup>⑦</sup>などして集まり候<sup>⑧</sup>ふに、「少納言<sup>⑧</sup>よ。香炉峰<sup>⑨</sup>の雪いかならむ。「と仰せらるれば<sup>⑩</sup>、御格子あげさせて、御簾<sup>⑪</sup>を高くあげたれば、笑はせ給ふ<sup>⑫</sup>。

人々も「さるごと<sup>⑬</sup>は知り、歌などに入歌入と、思ひこそ尋ひせりしれ。なほこの宮の人にはさべき<sup>⑭</sup>なめり<sup>⑮</sup>。」と言ふ。

3、補足・注／重要単語・文法

①高う…ク活用形容詞「高し」の連用形「高く」のウ音便。

②を…接続助詞。順接とする立場と逆説とする立場がある。ここでは順接とする。普段、口の中は御格子を上げているが、雪が降ったために、いつもと違い御格子を下げているという解釈。

③例ならず…いつもと違い

④御格子…格子を尊ぶ語。格子とは、細い角材を縦と横に組み合わせたもので、戸や窓にはめ、風雨を防ぐ。部しんみ。

⑤参り…「御格子参る」の形で、お上げする、お下げする。文脈により解釈する。ここではお下げする。

4

⑥炭櫃…火鉢。もしくは囲炉裏。

⑦物語…世間話。雑談。

⑧少納言…作者の清少納言。

⑨香炉峰…中国江西省北端にある廬山の峰。白居易の歌に「香炉峰雪撥簾看（香炉峰の雪は簾を撥けて看る）」とある。当然香炉峰は中宮定子のいる場所から見えるはずもない。しかしその様子を問うことで、この歌を踏まえて簾をかがけて外を見せよという投げかけをした。

⑩仰せらるれ…二重敬語。尊敬の下二段動詞「仰す」の未然形＋尊敬の助動詞「らる」の已

然形。二重敬語は、尊敬の語を重ねて使用する。天皇、皇后、中宮などの位の高い人や、その文章中での位の最も高い人などに用いられる。ここでは中宮定子に対する敬意。最高敬語とも。

⑪ **せ給ふ**…二重敬語。尊敬の助動詞「せ」の連用形＋尊敬の四段補助動詞「給ふ」の終止形。

⑫ **ちるいじよ**…そのようないじよ。そのような事柄。いじよは、「香炉峰雪撥簾看（香炉峰の雪は簾を撥（か）か（げ）て看（み）る）」とある白居易の歌のいじよ。

⑬ **ちんへき**…そしであるへき。ちんわじよ。し変動詞「ちり」の連体形＋当然の助動詞「へき」の連体形である。「ちんへき」の撥音便「ちんへき」の無表記化。

⑭ **なめり**…であるなうだ。断定の助動詞「なり」の連体形＋推定の助動詞「めり」の終止形である。「なめり」の撥音便「なめり」の無表記化。



5. 1、本文と現代語

雪がとても高く降り積もったので、いつもと違い御格子をお下げし申し上げて炭櫃に火をおこして、世間話などをして集まり

**雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて炭櫃に火おこして、物語などして集まり**

お仕え申し上げていると、(定子様が)「清少納言よ。香炉峰の雪はどのようだろう。」「とおっしゃるので、

(私は)御格子を上げさせて、御簾

**候ふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」「と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾**

を高く上げたので、(定子様は)笑いなせる。

**を高くあげたれば、笑はせ給ふ。**

(周りの)人々も「そのようなことは知っていて、(こういつときは)歌になど詠みはするけれど、(御簾を上げるのは)思いもよらなかつた。(あなた＝清少納言は)やはりこの宮の(お仕えする)人

**人々も「そのことば知り、歌などこそ入歌入と、思ひこそ尋ふむひしれ。なほこの宮の人**

にぶさわしいようだ。」「と言ふ。

**にほせ入まきなめり。」「と言ふ。**

## 5. 2、本文と現代語訳

雪がとても高く降り積もったので、いつもと違い御格子をお下げし申し上げて炭櫃に火をおこして、世間話などを

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて炭櫃に火おこして、物語などして集まりお仕え申し上げていると、(定子様が)「清少納言よ。香炉峰の雪はどのようだろう。」「とおっしゃるので、(私は)私(は)御格子を上

して集まり候ふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」「と申せられたは、御格子あげさせて、御簾を高くあげたので、(定子様は)笑いなさる。

げさせて、御簾を高くあげたれば、笑はせ給ふ。

(周りの)人々も「そのようなことは知っていて、(こういうときは)歌になど詠みはするけれど、(御簾を上げるのは)思いもよらなかつた。(あなた＝清少納言は)やはりこの宮の

人々も「さるごとくは知り、歌などにこそ入歌入と、思ひこそ尋ふぞつね。なほこの宮の世人にはさへきなめり。」と言ふ。

人にはさへきなめり。」と言ふ。

し	動詞・サ変・連用形	
て	接続助詞	
集まり	動詞・ラ四・連用形	
候ふ	動詞・ハ四・連体形・謙讓	作者→中宮
に、	接続助詞	
「少納言	名詞	
よ。	間投詞	
香炉峰	名詞	
の	格助詞	
雪	名詞	
いかなら	形容動詞・ナリ・未然形	
む。」	助動詞・推量・終止形 (連体形という説もある)	
と	格助詞	
仰せ	動詞・サ下二・未然形・尊敬	作者→中宮
らるれ	助動詞・尊敬・已然形	作者→中宮
ば、	接続助詞	
御格子	名詞	
あげ	動詞・ガ下二・未然形	
させ	助動詞・使役・連用形	
て、	接続助詞	

思ひ	動詞・ハ四・連用形	
こそ	係助詞（係）	
寄ら	動詞・ラ四・未然形	
ざり	助動詞・打消・連用形	
つれ。	助動詞・完了・已然形（結び）	
なほ	副詞	
こ	名詞	
の	格助詞	
宮	名詞	
の	格助詞	
人	名詞	
に	格助詞	
は	係助詞	
さ	動詞・ラ変「さり」・連体形（撥音便・無表記）	
べき	助動詞・当然・連体形	
な	助動詞・断定・連体形（撥音便・無表記）	
めり。」	助動詞・推定・終止形	
と	格助詞	
言ふ。	動詞・ハ四・終止形	

分解

	品詞等
	名詞
	格助詞
	副詞
	形容詞・ク
	動詞・ラ四
	助動詞・存
	接続助詞
	名詞
	助動詞・断
	助動詞・打
	名詞
	動詞・ラ四
	接続助詞
	名詞
	格助詞
	名詞
	動詞・サ四
	接続助詞
	名詞
	副助詞

御簾	名詞
を	格助詞
高く	形容詞・ク
あげ	動詞・ガ
たれ	助動詞・タ
ば、	接続助詞
笑は	動詞・ハ
せ	助動詞・セ
給ふ。	補助動詞
人々	名詞
も	係助詞
「さる	連体詞
こと	名詞
は	係助詞
知り、	動詞・ラ
歌	名詞
など	副助詞
に	格助詞
さへ	副助詞
歌へ	動詞・ハ
ど、	接続助詞